

環境フォーラム

環境コモンズの視点で見直す「苫東」の風土 ～勇払原野の新しい環境保全の試み～

自然と共生した複合開発を目指して開発が進められている苫東地域は、勇払原野の原形を色濃く残し、地域の宝と目されています。この苫東緑地の利活用を担うNPO法人苫東環境コモンズと(財)北海道開発協会に設置された環境コモンズ研究会の主催により、苫東の現況緑地を対象に新しい「環境コモンズ」の概念を提起し、その今日的な意味と展開の方向を考える環境フォーラムが10月16日(土)苫小牧市サンガーデンで開催されました。

基調報告

苫東環境コモンズの系譜

苫小牧東部大規模工業基地が計画されたのは1970年代の初めでした。1万ヘクタールを超す工業基地には、世界的にも例がない約30%を超す緑地を残し、日本で初めて環境アセスメントを取り入れ、環境とどう向き合うかが大きなテーマでした。その後、98年に苫小牧東部(株)は清算され、新しい会社・(株)苫東になり、この緑地のあり方を改めてどうするかという新たな課題検討の中で、苫東環境コモンズが提起されたという背景があります。

苫東開発は破綻したといわれていますが、苫東の空間を次の世代にどのようなふうにつないでいくかは、今後とも苫小牧地域だけではなく、北海道民あるいは日本国民にとっても大事なテーマです。



小磯 修二 氏
釧路公立大学長・地域経済
研究センター長

つまり、土地利用規制の少ない3割以上の緑地空間の活用をうまく取り入れることによって苫東に新しい魅力が出てきます。それによって苫東が、経済的な意味でも環境的な意味でも、北海道に創造的な価値を生む新しい取り組みにつながっていくという意味があります。

環境コモンズ研究会は、2008年に(財)北海道開発協会が学識経験者等をメンバーにスタートさせたものですが、同協会開発調査総合研究所の草苺健さんが地元で実践している活動を発展させNPO法人苫東環境コモンズを作り上げていく活動をバックアップするという位置付けもありました。

NPO法人苫東環境コモンズは、今年1月に法人登記、現在、正会員35名、団体会員8団体、特別会員5名という状況です。工業用地を所有する(株)苫東もこの緑地の活用には柔軟で、外側の幅広い担い手と一緒に進めていこうというスタンスで、社内に緑地の検討委員会を設け、NPOと包括的な協定を結びながら利用のあり方を考えていこうとしています。

「コモンズ」を考える 地域開発政策の今日の一番大きなテーマは、限られた地球の資源を前提に地域の政策、国の政策も考えていかななくてはならないということです。「オイルショック」のときにもこの議論はありましたが、改めて考えさせる契機となったのは「地球温暖化」の問題です。「共生」「連携」「協働」という言葉がいろんなところから出てきていますが、この背景には、限られた地球資源の中でわれわれはどう生き抜いていく知恵を持つべきかということがあり、持

持続可能な発展、持続可能な開発、持続可能な地域づくりということが言われるようになりました。この「サステイナブル」という言葉が出てきたことの意味は大変大きいと思います。

同じ空間に対しても、1人が独占的に使うよりも、幅広い共同、連携によってより大きい価値をもたらす使われ方ができれば、それは持続可能なこれからの地域づくりにとって大事なことです。それがコモンズです。

二つ目の視点は、地域政策を考えていく場合、特にわが国における土地利用制度の脆弱性が、日本の政策の大きな特徴です。日本の場合は、土地の所有権を極めて強く認めているので、土地の所有者は、その利用が極めて排他的になるという特徴があります。土地の所有とそこをどう利用するかという機動的な調整システムは、これからのまちづくり、国づくりを考えていくうえで大事なテーマです。そういう意味で、土地、空間の持つ価値を高めていく仕組みとして、コモンズという考え方をいろいろなところで提起していく必要があります。

三つ目は、コモンズを議論する中で、最近「共用」という言葉をよく使うようになりました。これからの時代、特に北海道では地域が自力でどう発展していくかが強く求められています。国の政策に頼るのではなく、独自の創造的な仕組みを地域から提案していかなくてはならないときに何が大事かという、自分一人の企業活動が利益を上げればいい、自分の生活が豊かなものになればいいという発想ではやることの限界があります。地域全体がトータルで発展して安定した地域社会が生まれれば、結果的に自分の企業経営も生活も豊かになるという発想でなければなりません。

最後に、「共用」の事例を紹介します。日本では地

方の都心部がどんどん寂れてきているという大きな問題がありますが、ヨーロッパでは同じような都市でも都心部に人が集まるにぎわいがあります。これは、中心になる教会や広場、商店街などが幅広い共用空間として機能して、魅力になっているからです。北海道にも、札幌市の大通公園や旭川市の買物公園のような例があります。「都心部の中心にコモンズ的な空間をどう作り上げていくか」という発想での議論が必要です。

二番目の事例は、「空間移動手段の共用化」です。自動車利用に頼った地域構造、交通構造の中で高齢化して車に頼れない人たちが出てきていて、公共交通の役割が改めて大事になってきています。また、札幌ではカーシェアリングが普及してきています。これからの地域社会の仕組みに、みんなで一緒に使おうという「共用」システムの展開は大事です。

コモンズを共用という視点から考えていくことで、これからの地域社会の新しい仕組みを考えていく、具体的な手掛かりが得られるように思います。

講演1

霧多布湿原トラストのファンはどうして生まれたのか

霧多布湿原トラストの活動は24年前、トラスト発足時の事務局長伊東俊和さんが、湿原をゆっくり見渡しながらコーヒーを飲める喫茶店を作りたいと移り住んだことから始まりました。2000年にNPO法人の資格を取得、「湿原を売ってください」という声を出し始め、9月にはナショナルトラスト第1号の土地を購入しています。



三膳 時子 氏
NPO法人霧多布湿原トラスト理事長

昔は海岸線の湿原の辺りを共同牧場として使っていたため、地主さんの多くは海岸線に住む漁師の方々です。土地取得は「貸してください」から始まり、徐々に「私たちは湿原を買います。譲ってください」というふうにはトラストの土地を広げています。



寄付から得たもの 去年、琵琶瀬展望台一帯を共同牧場として使っていた農事組合が解散することになり、1,200万円で土地が売りに出されました。湿原トラストの会費では全額を用意できなかったため、初めて会員に寄付を募ったところ、2カ月の間に1,800万円もの寄付が集まり、素晴らしい環境を未来の子供たちに残さなければならないというメッセージも届けられ、とても驚きました。

霧多布湿原の3分の1、1,200ヘクタールが私有地ですが、その約半分をトラストが買わせてもらっています。買いたいところはまだ、たくさんあるのですが、地域に合ったリズムがあると思いますので、ゆっくりやっています。また、昔埋め立てられた湿原を戻せないかどうか、小さな湿原修復という形の実験地でデータを集めることもやっています。

霧多布湿原のファン 情報発信から環境教育、漁業と酪農もありますので産物を紹介するなど、幅広い交流によりファンはどんどん増えています。

例えば、木道づくりの作業1日をするために前泊して、後泊するという形でのファンがいます。一緒に汗を流して、地元の人と交流したいという動機がすごくあるようで、大事にしていることのひとつです。また、トラスト職員のガイドよりも、漁師さんや酪農家さんが説明する方がとても友好的なおもてなしになります。そこでまた、漁師さんや酪農家さんにファンがつかます。そんな積み重ねでファンが増えてきたと思います。

今、湿原トラストの会員は、全国に2,800人います。北海道、東京、鹿児島、九州の博多には勝手連として「ファンクラブ」があります。そういう人たちの期待を裏切らないように、自分たちは地元でしっかり子供たちに教育したり、湿原を見ながらゆっくりした時間を過ごせるような環境づくりをしていけばいいと思っています。こんな小さな霧多布をどうしてこんなに熱く応援してくれるのか、どうしたらいいのだろうという思いもありますが、ファンクラブの皆さんはきれいなどころを見て、事務所に来てお話しして、理事たち

に会ってというのが、とてもうれしいみたいなのです。そして、私たちは、「そこに居て、頑張ってくれればいいよ」という言葉に支えられながら、おもてなしの心を忘れずにやっています。

講演2

地域力と環境保全をどうつなぐのか

「地域力と環境保全をどうつなぐのか」という話には、地域の私たちの意識をどのように環境に向けていくのかということがスタートにあると思います。私の幼少期は1970年代で日本の高度経済成長期でした。遊んでいた自然河川がコンクリートの三面張りになっていき、大人たちは都市化こそが近代化であると信じて疑いませんでした。子供ながらに遊び場を率先して壊しているのが自分たちの親だというのがショックでした。自然が好きで、新聞記者として就職しましたが、北海道はこれから自然を使った新しいことをやっていくべきではないかと思い、北海道自然体験学校「ねおす」(Natural Experience Outdoor School)に参画させていただくことにしました。それに猛反対する田舎の親、親戚にどうしたらわかってもらえるのか考えたのがスタートです。

地域力のきっかけ エコツアーリズム発祥の地といわれるコスタリカで、珍しい動物の撮り方の指導を受けた現地で、漁師とバーをやっているマスターに「コスタリカの自然、カウイタ地方の自然は大切なのか」と聞いたところ、「大切だ。なぜなら、おまえらみたいなのが来なくなったら、おれの酒代が減ってしまう」と言いました。これを聞いて、おやじに1日何杯かビールを飲ませることができれば、こっちを向いてくれるはずだと思い、日本に帰ってきて地元の小遣い程度のお金が落ちるようなエコツアーを始めました。

「地域」や「経済」なくして、「環境保全」は成り立



宮本 英樹 氏
NPO法人ねおす専務理事

たないということで、私は常にその三つをイメージしながら、地域力を自然につなげていくための手段としてエコツアーを用いています。あとは、おじさんたちが元気になる、自分たちで何かを考える主体性を生む「内発的発展」とでもいうものをいつも考えています。**エコツーリズムとは** 地域の人々と環境問題をつなげるための道具として、エコツアーという形を作ることができます。世の中に広告を打つだけではなくて、ツアーをやりますよという形で中間発表ができて、情報発信と形を作る作業が両方できる利点があります。

また、地域外とのやり取りと地域内の連関ですが、地域内だけではうまくいかないことが多いです。そうしたときに、地域外と少しやり取りができるというのがツアーの良さです。漁師さんから見れば、「うまい、うまい」と言って食べてもらえるシーンは、流通が複雑な今の日本ではそうなくて、自分たちがどういう商品を作らなければいけないのかを知る手掛かりになります。特にエコツアーに参加される方は、本物を求める人たちです。本物を目指したい、価値のある製品を作りたいと思っている生産者にはとても良い消費者で、ダイレクトマーケティングができます。本物を求めるので、こちら側も本物を提供しなければいけなくなり、提供する側も勉強しなくてはならなくなります。勉強するというプロセスの内在が、地域の人々を結び付け、成長させることにつながります。

工場型地域創造から劇場型へ 霧多布に「おぼろ昆布かけ（昆布削り）」の熟練者の方がおりましたが、当時は機械化されたとろろ昆布全盛でしたので、せっかく自分で培った技術も発揮できるところがなかったのですが、教えるというプログラムに参加してもらったら、笑顔になりました。自分が役に立つということを再発見すると、人はどんどん成長し、それが地域を成長させていきます。観光という視点から見れば、経済的な視点も大きいのですが、私自身はそれが真のエコツーリズムの効果と思っています。

エコツーリズムをすると、商品開発もしてみたくな

ります。今まで知り合いではなかった漁師の人と酪農の人がくっつかないと、旅行商品は作れませんし、今までカヌーしかやっていなかったカヌーガイドも漁に行けないのかと言われてしまうようになります。そうになると一緒に学習する機会も増えてきます。そこで、初めて内発的な経済とかコミュニティービジネスということになるのです。

最近は、「工場型地域創造から劇場型へ」と思っています。今までは協働で同じことをするのが仲間だったと思いますが、劇場で劇を作るように、全く違う人とも結びついて一つのことを作り上げていくことが大事だと思います。苦東でも、なるべく多様な人をなんとかまとめ新しいものを作っていくという森になると、さらにいろんな人がかかわってくることと思います。

特別プログラム

『森と水の庭ウトナイ』の上映とスピーチ



あきよし
北川 陽稔 氏
映像作家・経専音楽放送
芸術専門学校専任講師

この作品では、あまりネガティブなことはあえて取り上げずに、この地域にどういう状況があって、北海道の未来を考えるに当たってどんなポジティブな要素があるのかを、自分の中で主眼に置いて制作しました。

冒頭に出てくる丹治一二三さんの「森と水がいわば一つのネットワークになって地域の自然が守られている」という話をとても深いことだと感じ、それが軸になって全体の構成が出来上がってきました。

丹治さんからは生活のための森の大切さがすごく伝わってきましたが、次の次元として、心身の癒しの場としての森という次元も草薙さんへのインタビューで見えてきました。最終的には、そこからもっと先にある人間の力や意識が及ばない、すごく深い次元にある森や水、自然というものが見えてきたように思います。

※ なお、環境フォーラムの全文は整い次第、当協会のHP (<http://www.hkk.or.jp/kenkyusho/>) に掲載する予定です。